

この世に存在するすべてのものは、関わりあって生かされています。他者を思いやる心持ちを育てるには、宗教的情操教育が大切です。

『未徹在』を座右の銘とし、汚泥に染まらない蓮の生き方を見習うべきと考えています。



華嚴宗管長・第220世東大寺別当

きた か わら こう けい
北河原 公敬 師

▶ あらゆる関わりあいの中で生かされている

— 別当にご就任されて約1年が経過しますが、この1年を振り返ってのご感想はいかがですか。

正直申しまして、あっという間に1年が経ちました。とくに昨年は、晋山式しんざん（新別当の就任式）のほか、光明皇后の1250年御遠忌法要や東京国立博物館での特別展「東大寺大仏一天平の至宝」、中国揚州市への鑑真和上像の里帰り、また平城遷都1300年祭関連など多数の行事がありましたので、月日が早く経ったと感じています。

— 最近の不安な世相をどのようにお考えですか。

近年、殺伐とした、極端に言えば骨肉相争うような残忍な事件が起きたりするなど、我々の立場からすれば気になるところです。

華嚴経の教えでは、この世に存在するすべてのものは、個として存在しているのではなくて、す

べて関わりあって存在しているという「縁」について説かれています。私たち人間社会においても同じで、自分一人の力でこの世の中に生きているわけではなく、周りにいる色んな人たちとの関わり、相互作用、支援などがあって、はじめて私たちはこの世の中に生かされています。

何も人間同士の関わりだけではなく、水や太陽などの自然の恵みなどがあって生かされているわけですが、そういうような思いが薄れていると感じます。そういうことをみんなが念頭に置いて生活していれば、人を殺めたり、骨肉相争うようなことは、本来ならば起こらないと思います。

平成16年に長崎県佐世保市で小6女兒同級生殺害事件が起きましたが、命を絶つということの意味が普段からもう少し子供たちに教育されていれば、そのような事件は防げたと思います。

— こうした世相の背景には、どのような要因があるとお考えですか。

これは個人的な見解ですが、そのようなことが起こるのは、戦後の公教育における政教分離のひずみのようなものが出ているのではないかと考えています。公教育での政教分離は否定しませんが、例えば、これは貴ぶべきものであるとか、これは冒（犯）してはいけないものであるとか、そういうような意味合いでの宗教的情操教育を学校においてもっとやっておくべきであったと思います。小さい子供の頃から、宗教的情操教育のような意識、価値観を伝えていくべき役割が今の宗教者に求められていると考えています。

10月9日、南大門西北に東大寺総合文化センターがグランドオープンいたしますが、奈良で宿泊する修学旅行生たちに夕食後にその中のホールへ来てもらい、東大寺のことや華嚴の教え、時節の話題などを聞いてもらうことがいいのではと考えています。奈良で泊まれば、夜に法話を聞かせてもらえるということで、奈良に泊まろうと考える学校が出てくるのではと思っています。

▶ 他者を思いやる心持ちを

— 東日本大震災の発生を受け、1億円を借財して義援金として協力されたということですが。

本来ならば人手を出して現地で直接支援すべきなのですが、東大寺は組織が小さく難しいものですから、1億円の借財をして義援金として協力させていただきました。



借財を返済していくことは、ある意味で被災者の方々と痛みを共有することになり、今回のような大きな国難とも言われる災害を忘れない

ことにもつながると思っています。

また、被災地の方が心の拠り所とされている、文化財、宝物類等も大きな被害を受けていると聞いています。東大寺では、一般の募金とは別に文化財用の募金箱も設置して募金を集め、文化財の修復に継続して協力していこうと思っています。

— 募金やボランティアなど、多数の支援が寄せられていますが、どのように感じておられますか。

自然災害に遭遇して困っている多くの人に手を差し伸べることは、ボランティア精神というか、菩薩の道であり、慈しみの心をみんながまだ持っているということです。まだまだ日本人は捨てたものではありません。

そういう素地がみんなにあることを考えると、殺伐とした事件などが起きるとは信じられないのですが、現実にはそういうことがあちこちで起きています。この現実を踏まえると、いざという時ばかりではなくて、普段の日常生活においても、他者を思いやるという心持ちを植え付けていくことが必要と思います。

— 他者への思いやりが大切ということですね。

人間だけではなく、ものを言わない物にも心があります。例えば、高い所の物を取るのに脚立を使わず、机の上に足をかけて取ることがありますが、それは本来の机の役割ではありません。

もし自分が机の立場だったら、「こんなところになぜ足をかけるんだ」と言いたいと思います。そのことを私たちは余り意識していません。そこまで私たちはおもんばかるということが少なく、他者に対しても同じようになっています。

物にも心配りをするような心持ちを持っているならば、人間に対する心配りはより一層深まると思います。物の役目というか、よって立っている根拠になるところを理解せずに物を取り扱ったりするというのは良くありません。

— 今の日本人には、何が必要でしょうか。

日本社会が余りにも至れり尽くせりになってきましたので、自分の注意力や感性を働かそうとし

ないわけです。言われたら、言われたとおりにすることに慣れてこなくなっています。最近の日本人は、注意力や感性が落ちてきているため、外国へ行くと、ある意味での過剰な表示やアナウンスがないため困ってしまうことが多いのです。

戦後、日本は資本主義の下で、個人の尊重が重要視され発展してきたために自分の我を通すという感じが強くなっており、相手の立場なり、心持ちなりを何の斟酌もしないで進めてしまいがちです。自分さえ良ければ、それですべてよしという意識が強く、宗教的な心持ちが欠けてきていると思います。

以前、経済評論家の内橋克人さんが、戦後続いってきた競争経済から、今後は自分の利益は他者の利益や幸せにもつながるといふ共生経済をめざすべきだと話されていましたが、私も同意見です。仏教的に言うとなり菩薩道として、菩薩は自利と他利の両方を兼ね備えた状態をめざす心持ちです。自分と他者との関わりにおいて、相手をおもんぱかる気持ちを持つことが大切だと思います。

▶ 世界平和、国家の安泰を願って

— 修二会が1200年以上一度も途絶えることなく続いてきた要因は何でしょうか。

修二会は、東大寺では一番大きな行法です。1260回一度も途絶えることなく今日まで続いて

おり、世界的にみても稀であると言われていています。我々の代でこれが途絶えるようなことがあってはいかん訳で、私達もそれをしっかり受け継いで後世に伝えていくという大切な責務があります。

修二会が絶えずに続いてきたのは、東大寺だけのためではなく、人々のため、国家のための行法であるということが大きな要因だと思います。

二月堂のご本尊の十一面観音菩薩の前で、私達が日ごろ犯している罪や咎、穢れなどを懺悔する、私どもでは悔過と申していますが、懺悔とともに人々の幸せなり、あるいは世界平和や国家の安泰、五穀豊穰など、ありとあらゆる人々の分もあわせて祈ります。この行を11人の練行衆が代表して勤めさせていただいています。

また、この行法は東大寺単独でできるわけではなく、いろんな人たちの協力や支援、行法に必要な物のご奉納を受けてこの行が成り立っています。それがあつたればこそ、続けていくことができたわけで、それに対して応えていくということでもあります。

— 東大寺奉納大歌舞伎や東大寺音舞台等の文化的な行事に対するお考えを教えてください。

私どもでは慶讃の奉納行事と申していますが、大きな法要の際に法楽（神仏を楽ませること）の意味としてご本尊に奉納してもらつとともに、参拝者の方にも親しんでいただけるような場が昔



からありました。約1260年前の大仏開眼供養会の際にも法要とともに、外国の踊りや音楽などが奉納されました。

皆さんに注目いただいたのは、やはり昭和55年の大仏殿昭和修理落慶法要の時、5日間にわたりコンサートや歌舞伎など色々な奉納行事を行いました。皆さんが本当に驚かれたようですが、その後うちに倣えで他にも同じようなことが行われて一般的になりました。

お寺という所は、沢山の色々な方々

に来ていただくというのがやっぱり良いのであって、そういう意味で普段は来られない方でも奉納の際に来て接していただくということは大切です。

— 東大寺ミュージアムの概要や、東塔（七重塔）復興への意欲・思いをお聞かせ下さい。

法華堂の修復が始まり、この機会に仏様も一部、美術院の方に預けて小修理を行っています。現在、日光・月光菩薩立像（国宝）は、東大寺ミュージアムに安置されることが決まっています。

東塔の再建については、先日、2回目の東塔基壇跡の非破壊探査が終わりました。その結果を受け、東塔復興委員会を設け、何ヶ所かを発掘して基壇部分を確認し、どの程度の規模のものが立っていたか、立つかということを専門家の方に検討していただく予定です。

私の在任中に東塔が完成するわけではありませんが、東塔復興の緒についたらいいと思っています。それをまた後世の方が引き継いで完成してもらったらと思います。

▶ 汚泥に染まらない蓮の生き方を見習う

— 日頃、どのようなことを心掛けていますか。

私自身、何事も100%ということはありません、未熟である、まだまだもっと努力しなければいけないという心持ちを常に抱いて日常を送ることが大切である考え、「未徹在^{みてっさい}」（禅語）を座右の銘としています。未徹在は、未だ徹するに在らず^あということで、仏教的に言えば「まだまだ悟りを得るに至っていない」ということを意味しています。

また、謙虚さ、誠実、精励も大切なことだと思っています。

— 蓮の栽培を趣味にされていますが、蓮のどのようなところが好きですか。

私の祖父である公海長老（第200世別当）が他界した日の朝、病院から戻ると咲かずにいた蓮が一輪咲いていました。そのときに何か因縁めいたものを感じ、蓮の栽培を始めました。本格的にやりだすと、なかなか香^{かぐわ}しく、姿かたちも気品があ

り、高貴な花だと、蓮を見直したわけです。

蓮は、泥の中で育つわけですが、その泥に染まらず高貴で清楚な花を咲かせます。これは、ある意味、私たち人間が世の中の汚泥の中で生きていて、その汚泥に染まらずにきちんとした人間らしい生活、あるいは人生を送るべしということ、蓮は教えてくれているのかなと私なりに感じ、蓮もいいものだなと思うようになりました。

●プロフィール 北河原 公敬 師

■主な経歴

昭和18年（1943年）生まれ、68歳。

昭和37年3月学習院高等科卒業後、龍谷大学（仏教学科）へ進学。昭和43年3月、龍谷大学大学院（国史学）修士課程修了して後東大寺に出仕。華嚴宗庶務部長・東大寺庶務執事、華嚴宗宗務長・東大寺執事長等の山内要職を経て、平成22年5月に華嚴宗管長・第220世東大寺別当に就任。

■座右の銘

未徹在

■大切にしていること

謙虚・誠実・精励

■趣味

花蓮の栽培（蓮グッズの収集）・音楽鑑賞・スポーツ観戦

■好きな食べ物

ケーキ、アイスクリーム

■県内で一番好きな場所（よく訪問される場所等）

二月堂舞台からの夕景色

■所属企業・団体等の概要

華嚴宗大本山東大寺—奈良時代に聖武天皇の発願により創建。本尊・盧舎那仏坐像は天平勝宝四年（752年）に開眼。以後、治承の兵火、永禄の兵火と度々戦火に遭いながらも、聖武天皇の創建の精神「一枝の草 一把の土^{ひとえだ ひとにぎり}」にのっとり、多くの人々の結縁のもと復興を遂げてきた。寺務所：奈良県奈良市雑司町406-1

電話：0742-22-5511、FAX：0742-22-0808

（聞き手・文責：島田清彦）